

令和7年度・網走市地域猫活動支援事業

市民意見交換会「野良猫対策について考える会」開催報告

1. 開催日時

令和8年1月29日（木）午後6時から午後7時30分（開場：午後5時30分）

2. 開催場所

オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）3階学習室
（網走市北2条西3丁目3番地）

3. 参加者数

20名

4. 開催概要

- (1) 開会
- (2) 網走市の現状と課題（事務局：網走市市民環境部生活環境課環境対策係）
- (3) 講演
 - ア. アドバイザー①：和田 孝子 氏（非営利型一般社団法人アニウェル北海道）
 - イ. アドバイザー②：大沼 忠志 氏（一般社団法人オホーツクねこの会 会長）
- (4) 意見交換会
- (5) 閉会

5. 開催結果

◆事務局「網走市の野良猫対策事業について」

（網走市の現状、令和6年度および令和7年度の取り組みについて報告・紹介）

【内容要約】

- ・網走市への野良猫に関する苦情は令和5年度に17件へと増加傾向で、苦情内容は糞尿被害や鳴き声が主となっている。
- ・路上での死体回収（交通事故等）も令和5、6年度は40件弱に上っている。
- ・「野良猫だらけの状況は誰にとっても望ましくない」という共通認識に立ち、市民と協働して対策を進めるスタンスを示した。
- ・令和6年度に市が招聘した地域猫活動アドバイザー・石森信雄氏の講演会を機に、過去の「餌やり全面禁止」の指導から方針を転換し、「不適切なエサやりを禁止」に変更。

・餌やりを行っている人を味方につけ、適切な管理（時間を決めた給餌等）を行う協力者として巻き込むことの重要性を強調。

・令和7年度はクラウドファンディングによる寄附金を調達し、捕獲器の貸出や不妊去勢手術費への補助（令和8年1月29日時点で33匹実施）といった新たな支援事業を開始したことを報告。

◆アドバイザー2名からのご講演・事例報告等

（1）非営利型一般社団法人アニウェル北海道 和田 孝子氏

【内容要約】

1. 最も重要なのは「広報・周知」

- ・事前の周知：活動において最も重要なのは「意識啓発・広報・周知徹底」であると強調。
- ・失敗の教訓：過去に、「猫が増えたら大変だ」という思いから、近隣への説明なしに手術を先行してしまった際、住民から「勝手なことをするな」と激しい抗議を受けた経験があった。
- ・手順の遵守：「面倒くさい」「苦情を言われるのが怖い」という理由で周知を省くと失敗するため、資料（練馬区の石森氏作成のマニュアル等）を持って一軒ずつ説明に回るという手順を踏むことが重要であると説明。

2. 地域猫活動への理解と合意形成

- ・対話の重要性：マニュアル通りに資料を持って一軒ずつ説明し、疑問を持つ住民には直接訪問して説明することで、活動への同意や、手術費用のカンパが集まるなどの協力が得られた事例（成功例）を紹介。
- ・猫が嫌いな人への配慮：猫が嫌いな人の気持ちに寄り添い、「猫たちが嫌われないための活動」を行う姿勢が重要。

3. 手術以外の管理（糞尿対策・トイレ設置）

- ・手術だけでは解決しない：手術をして猫がこれ以上増えなくなっても、今いる猫の糞尿被害はなくならないため、手術をただけでは問題は解決しない。
- ・具体的な対策：苦情を沈静化するために半年間ボランティアと糞拾いをしたり、理解のある住民の庭や車庫に「猫用トイレ」を設置させてもらったりする対策を実施した。

4. 協力者を増やすことの重要性

- ・仲間づくり：一人でも協力してくれる人が増えれば活動はスムーズに進みやすく、周知活動を通じて協力者を見つけることが成功につながる。
- ・相談する：自分たちだけで悩まず、行政や経験者に相談し、誰かと共有することで解決に近づく。

5. その他の補足情報（質疑等での発言）

- ・捕獲のタイミング：自身の団体では3月などに集中的な手術日を設けており、それに合わせて捕獲を行うよう呼びかけた。

(2) 一般社団法人オホーツクねこの会 会長 大沼 忠志氏

【内容要約】

1. 野良猫問題の原因とTNRの必要性

- ・問題の根本：野良猫が存在するのは、元々誰かが捨てたことや、不妊去勢手術をせずに増やしてしまった人間の責任であると指摘。
- ・繁殖制限（TNR）：今いる猫をすぐにゼロにすることはできないため、これ以上増やさないための繁殖制限（TNR）が不可欠。手術をした猫は子供を作れない「一代限りの命」となり、その命を地域で見守るべきだと説明。
- ・過酷な環境：外にいる猫の寿命は平均3～5年と短く（家猫は20年生きることもある）、環境は厳しい。保護には限界があるため、不幸な猫が生まれないように手術を進める必要がある。

2. 適切な餌やりと管理

- ・時間管理の徹底：餌やりをする際は時間を決め（例：朝8時にあげて30分後に下げる）、置き餌をしないことを徹底すべき。
- ・個体数の把握：餌の時間を管理することで猫の動きが定まり、地域に実際に何匹いるのか（重複カウントを防ぐなど）の管理がしやすくなる。

3. 市民主体の活動と行政の役割

- ・「丸投げ」の禁止：行政（市）は助成金、捕獲器の貸出、手術場所の提供などのサポートを行うが、実際の「捕獲」や「搬送」は地域住民が行う必要がある。
- ・市民の参加：「役所がやってくれる」と丸投げすると活動は続かないため、猫の動きを一番知っている住民自身が主体となって動くべきだと強調。
- ・相談から始める：文句を言うのではなく、「困っていることがあるから解決方法を一緒に探ろう」という姿勢で、市民から声を上げて行政と協働していくことが重要。

4. 手術によるメリットと実施体制

- ・被害の軽減：不妊去勢手術（TNR）を行うことで、発情期の鳴き声や尿の臭い（スプレー行為）などの被害が軽減される。
- ・協力体制：北見市などの事例を挙げ、熟練した獣医師（江別市）の協力や、市民ボランティアが手術箇所の毛剃りなどの手伝いをする体制づくりについて触れ、網走市でもそのような市民運動が広がることについて期待。

5. その他の重要事項（質疑等での発言）

- ・周知の重要性：飼い猫か野良猫かの区別がつきにくい場合があるため、捕獲を行う際は事前にチラシなどで町内会など地域への周知徹底が必要。

◆意見交換会

テーマ①「TNR（捕獲・不妊去勢手術・元の場所に戻す）や不妊去勢手術」について

・実施体制への要望と賛同

猫をこれ以上増やさないために必要な活動であるという賛同や、個人の負担（飼育や餌代）が大きいためTNRには賛成であるという意見があった。

網走市内の動物病院でも手術ができれば良いという要望があり、これに対して市側は、費用は発生するが市内でも対応可能であり、補助金も出していると回答。

・活動における不安や課題

野良猫か飼い猫かの区別がつかず、TNRをして良いか分からないという意見に対し、まずは近隣への周知や看板設置から始めるべきというアドバイザーからの提案。

他地域（紋別）での事例として、手術後に猫の調子が悪くなったという噂や、手術の質に対する懸念が示されたが、これについてはアドバイザーや獣医師会関係者から、術前の合意事項や誤解の可能性についての補足説明が行われた。

手術を「かわいそう」と言う人もいるが、不幸な猫を増やしている現実を考えるべきであり、飼い主のいない猫が生まれてしまう以上、不妊去勢手術は進めなければならないという意見があった。

・新しいアイデア

網走市のLINEを活用して「野良猫マップ」を作成し、位置情報や写真で管理することでTNRにつなげたり、発見者にメリットがある仕組みを作ってはどうかという提案があった。

テーマ②「餌やり・地域猫」について

・地域社会との関わりと難しさ

猫が好きな人ばかりではないため、「地域で温かく見守る」という地域猫活動は現実的に難しいのではないかという意見があった。

実際に餌やりをしている人を知っているが、苦情も来ているため大変そうであり、まずは市民に活動を理解してもらうことが先決だという指摘があった。

・行政への要望と現状認識

住民への周知が最も大切だが、行政が関与する仕組みを作してほしいという要望が出された。

そもそも網走市に野良猫が多いのか、なぜこのような会が開かれたのかという疑問も呈された。

昔は野良犬がいたが現在はいないように、将来的には野良猫もいない状態を目指すべきだという意見があった。

・活動のあり方

かわいそうだからといって全ての猫を家で飼うことはできないため、「地域猫」という形で近

隣の理解を得て命を見守り、幸せにしたいという意見があった。

単に手術をして餌をやるだけでなく、人間と同様に猫にも性格や習性があるため、猫の習性を勉強し理解を進めることが必要だという意見があった。



意見交換会の様子